島根大学教育学部紀要（人文・社会科学）第20巻　1～6頁　昭和61年12月

はずかしがりやであること
――青年期の自我の一様相として――

堤　雅　雄*

Masao TSUTSUMI

Being Shy――As an Aspect of Ego in Adolescence

序

児童期にあっては，「自分が自分であること」は疑うことさえあり得ない自明性の中にある。しかし，この自己の自明性を支える中核たる身体は，思春期を迎えて一挙に叛乱する。きのうまでの自己の身体は，今日はもはや同じものではなくなる。身体の奥底から突きあげてくる衝動も，身体を通して他者から見られる自己の像も，いずれもこれまでの自己とは異なった形で体験されようになる。対自的自己も対他的自己も，共にこれまでの自明性を喪失して，不明なものとなるのである。

自我にとって最初の危機を，幼児期の「見捨てられる不安」と「呑み込まれる不安」のうちに見るならば，第2の危機は，青年期のこの「見る自己」と「見られる自己」の同一性の同時的喪失に伴って，統一性を失い，分裂し拡散していく自己への不安に見ることができる。自己に覚醒した青年ナルシスにとって，この危機から自分を守る途は次の3つである。1つは「見る自己」にしがみつき，「見られる自己」を否認，拒否，場合によっては抹殺することによって自閉的な世界に生きること。いま1つは「見られる自己」にとらわれて，「自分が自分であること」総体を他者に委ね専ら対他存在として生きること。そして最後の1つは，「見る自己」にも「見られる自己」にも救いを見出せず，ただただこの2つの問を漂い生きること。

第1の途が分裂病的な世界へ，第2の途が躁うつ病的な世界へと向うとするならば，第3の途は対人恐怖病的な世界へとたどりつく。そして多くの青年はこの第3の途，内沼（1983）流に言えば，我執と没我の二重性を，自己と他者の「間」を，即ち「羞恥」を生きるのである。

羞恥することへの虞れ―内なる他者への意識

かつて作田（1972）は，羞恥の本質を，他者からの注視の感得によって喚起される，自己と他者の志向の食い違いの意識に見出した。この「食い違い」の意識とは，より正確にいえば，食い違いが他者の注視の下に露呈されるのではないか，という虞れである。そしてこの虞れが，日本人をしてあらゆる注視に対して警戒的にする，というのである。

このような自他のまなざしの交錯に対する予期的不安は，必ずしも現実に対応している必要はない。極めて観念的な思い込みであることも多いのである。その典型的な例が，対人恐怖症者の種々の症状の中に見られる。

例えば赤面恐怖症者の場合，本人が訴える程に実際に赤面していることは少ない。患者が捉われている思いはむしろ「赤面するのではないか」という恐れである。視線恐怖や表情恐怖においても同様に，問題なのは自分の視線や表情が他者を侵害するのでは，という恐れである。さらに，醜形恐怖の場合もやはり，実際に容貌が醜いことは稀で，多くは「妄想」に近い思い込みだという（山下，1977）。

従って，羞恥や対人恐怖心性にみられる「他者」のまなざしの意識は，より厳密にいえば，「内なる他者」への意識であり，児童期の社会化の過程で取り入れられ（introjected），内在化された他者のまなざしへの意識である。このことは視線に対する意識についての実験的研究でも示唆されている。「見つめられる」感覚は，必ずしも実際に受ける視線の量には規定されないのである（Argyle, 1969 及び堤，1985）。

* 島根大学教育学部教育心理学研究室

羞恥する者

羞恥心性や対人恐怖心性が，青年期の自我にとって極めて親和的であろうことは充分に考えられることであるが，一方で現代の若者の「ねあか」な横顔を見ていると，そう言いきっていいのかどうか自信がもてない。彼らは本当に自分のことを「はずかしがり屋」だとみているのだろうか。

アメリカ，スタンフォード大学の Zimbardo ら（1974）は，彼らの被験者（高校生及び大学生817名）の実に42％が自らを Shy だとみなしており，しかもその多くが Shy であることを問題としていると報告している。奥床しさや謙譲を一種の美徳と感じる我々日本人に比べ，自己主張（performance）や社交性を重視する文化に生きるアメリカ人にしてこの数字は一見驚かされるが，考えてみれば形成過程にある自我に，程度の差はあれ，本質的な違いがなくとも不思議ではない。これまで対人恐怖症や羞恥については，しばしば日本人特有の心性として論じられてきた。確かに，個々の文化が内包する価値観によって，社会的適応ないしは不適応の形態に違いが生じるのは事実であろうが，自己感覚や他者感覚によって構成される心性そのものは，それほどの違いはないようである。

実際に日本人の場合どうであろうか。

以前我々が，試みに Zimbardo の Stanford Shyness Survey（Zimbardo, 1977）を翻訳し，実施してみたところ，大学生男女各50名，計100名中，自分をはずかしがりや（内気）だと思う者は65名，以前ははずかしがりやだったと答えた者は17名に対し，これを否定する者は18名に過ぎなかった（表1参照）。しかも彼らの多くが，周囲の人々からはずかしがりやだと思われているかとの問いには否定的に答えているのである。（1から5の5点尺度上で平均1.18〜2.19）。「他人から見ればそうは見えないだろうが，自分ははずかしがりやだ」と思っている若者が多数を占めているのである（堤他，1982）。

表1　大学生における「はずかしがりや」であることの自己認知（堤他，1982）

	男	女	計
自分をはずかしがりやと思う者	32名	33名	65名
（うち，以前からずっとはずかしがりやであった者）	(25)	(31)	(56)
自分をはずかしがりやではないと思う者	18	17	35
（うち，かつてははずかしがりやであったと思う者）	(12)	(5)	(17)
計	50	50	100

「はずかしがりや」とは何か。「はずかしがりやであること」についての自己認知と他者からの認知は，実際に交錯しているのであろうか。このことを確認するために素朴な調査を計画してみた。

調　査　I　（予備調査）

被験者

被験者は，国立大学教育学部の教育心理学専攻2年生，16名（男子5名，女子11名）。いずれも年令は19才〜21才。彼らは2年生になって以来3ケ月間，初級心理学実験実習等で行動を共にしている。

質問紙 I-A

被験者はまず，「はずかしがりや」であることはどういうことか，について自由記述を求められる。その上で，自分自身を含むメンバー全員について，「はずかしがりや」であるか否か，2件法での評定を行なう。

質問紙 I-B（MPI）

質問紙 I-A 施行の1週間後に，被験者全員にモーズレイ性格検査（MPI，誠信書房）を用いて，外向性尺度（E），神経症的傾向尺度（N），虚偽発見尺度（L）の3尺度値を測定する。

2つの質問紙はそれぞれ独立に与えられ，相互の関連については一切説明されない。

結果と考察

1．「はずかしがりや」観について

被験者の描く羞恥者像は，主として次の2つに大別される。1）主体性（Identity）のなさからくる消極性や自信のなさ，2）自意識及び他者意識の過剰による非社交性（内気さ）。

以上のような羞恥者観は，それ自体，若干の否定的トーンを帯びるものの，「自分がそうであるが故に」と断った上ではっきり否定的に述べた1人を除き，おおむね予想以上に価値中立的な，客観的な表現となっている。「自分に正直な人」，「世間ずれしていない人」といったむしろ肯定的な表現を用いた者も2名いた。

2．羞恥特性についての自・他評定

「はずかしがりや」であるか否かについての，自己及

表2　「はずかしがりや」であることについての自己評定，及び他者からの評定（大学生）

		他者からの評定(O) +	他者からの評定(O) −	計
自己評定（S）	+	4(2,2)	9(3,6)	13(5,8)
	−	0	3(0,3)	3(0,3)
計		4(2,2)	12(3,9)	16(5,11)

（　）内は男・女の内訳

び他者に対しての評定を，各評定対象者ごとに集計し，被評定数を求め，整理した結果を表2に示す。ここで「他者からはずかしがりやとみなされた者（O^+）」とは，他のメンバーの半数以上（8名以上）にはずかしがりやと評定された者（被評定度数8以上）のことである。

ご覧のように，はずかしがりやを自認する者が全体の8割（13/16）を占め，しかもそのうち，自他共に認めるタイプ（S^+O^+）は4名に過ぎず，多くは，他者からは必ずしもそう見られてはいないにもかかわらず，自己を「はずかしがりや」だとみなす（S^+O^-），いわば「主観的羞恥者であった（彼らだけで全体の半数を超える)。なお，この S^+O^- の9名の平均被評定数は，S^+O^+ の9.5（人)に対し，4.89（SD＝1.54）であった。

3. MPI 下位得点と被評定数との関連

MPI のE・N・L の各下位得点と，はずかしがりやについての被評定度数との相関を算出し，表3に示す。有意な正の相関がL得点においてみられた（念のため順位相関をとってみたところ，γ_s＝.736　でやはり有意であった)。即ち，他者からはずかしがりやだとみなされ易い人ほどL得点が高かった。このL得点に示される，自分を実際以上に良く見せようとする傾向は，他者の視線への意識（公的自己意識）の強さとも取ることができる。他人の眼を気にしやすい人ほどはずかしがりやとみなされやすい，という意味においてこの結果は了解できる。これ以上の分析は，標本数が少なすぎるが故に無理である。

表3　被評定度数とMPLの各得点とのピアソンの相関係数(大学生n＝16)

	MPI E	MPI N	MPI L
はずかしがりやであるとの被評定度数	−.24	−.08	.79**

**……1%水準

調　査　II

調査Iで扱ったような16名視模の小集団では，成員相互の関係は緊密であっても，標本としてはあまりに小さすぎる。調査IIでは，Iの倍近い大きさの集団を取り上げる。同時に，はずかしがりやに対する態度や，近年すっかり若者達の日常語になっている「ねくら」についても，同様に質問を試みている。

被験者

被験者は，県立看護学院の1年生29名。全員女性で，年令は18才及び19才。4月入学以来3ケ月間，同じクラスで授業等の行動を共にしている。

質問紙II-A

質問紙I-Aの内容に，新たな次の SD タイプの質問項目を加え，はずかしがりやに対してどのような感じを抱いているかを問う。

明るい――暗い
遠い　――近い
好き　――嫌い
悪い　――良い（いずれも5点尺度）

質問紙II-A（MPI）

調査Iに同じ。

質問紙II-C

「はずかしがりや」と同様に，「ねくら」についても，ねくらであるとはどういうことかの自由記述，及びねくらであるか否かについての自己，及び他者についての評定を求める。

結果と考察

1.　羞恥特性についての自己評定

自己をはずかしがりやとみなす者は29名中20名で，約7割を占める。うち，他のメンバーからもそうみられている者（S^+O^+）が半数で，残りの半数（全体の約1/3）が「主観的羞恥者」（S^+O^-）である。これに対し，自己をはずかしがりやでないと思う者9名は，調査Iと同様に全て他者からも同様にみられている（表4)。両者の分布には直接確率法で0.1%水準で違いがみられる。

S^+O^+, S^+O^-, B^-S^- の3群の平均的被評定度数の間には有意な差がみられる（F＝34.19, df＝2,28, P＜.01)。

表4　「はずかしがりや」であることについての自己評定及び他者からの評定(看護学院生)；括弧内は被評定度数の平均とＳＤ

		他者からの評定（0）＋	他者からの評定（0）－	計
自己評定(S)	＋	10名 (18.65 / 2.6)	10名 (9.85 / 3.4)	20
	－	0	9 (6.11 / 4.2)	9
計		10	19	29

表5　「はずかしがりや」であることと「ねくら」であることの，自己評定における関係

		「ねくら」であることについての自己評定 ＋	「ねくら」であることについての自己評定 －	計
「はずかしがりや」についての自己評定	＋	10	9	19
	－	2	7	9
計		12	16	28

特に S^+O^+ と S^+O^- の差の大きさが目につく。S^+O^+ が，他のメンバーの約3分の2にはずかしがりやと見られているのに対し，S^+O^- ではそれが3分の1に留まる。

2.「はずかしがりや」観

看護学院生の回答は，大学生に比して全般に記述量が少な目で，内容も比較的単純であった。

約半数（15名）の者が，「人前」での緊張や，「人目」に対する忌避の側面を論じている一方で，これとは表裏の関係にある，「本当の自分」の露呈や自己表現に弱いことを挙げる者も多かった。自己意識かあるいは他者意識のいずれかについて触れ者たが大半（24/29）であった。

4項目の形容詞対によってうかがわれる「はずかしがりや」に対する態度はどうか。5点尺度の平均値としてみればやや否定的，即ち弱く（平均；2.62，SD；0.98）遠く（2.83, 1.17），嫌いで（2.45）1.09），悪い（2.62, 0.73）ものとしてみているようである。あとの2項目について，肯定・否定・中立の3分法で見直してみると，はずかしがりやであることを好きな者4名，中立8名に対し，嫌いな者は17名と過半数であった。また良いとする者2名，悪いとする者11名に対し，良いとも悪いとも言えぬとする者が16名と過半数を占めた，全体としてはやはり否定的な態度の者が多いが，中立反応の多さをみると，この複雑な心性を二者択一的に問うことの困難さを感じさせられる。

なお，これらの反応と，さきの羞恥に対する自他認知との間に，はっきりした関係は見出せなかった。

3.「はずかしがりや」であることと「ねくら」であること

同時に行なった，「ねくら」であることについての相互評定では，「はずかしがりや」の時よりも否定反応が多かった。まず，他者からの被評定度数は，被験者1人あたり平均3.26(人)，率にして11%で最大の者でも9に過ぎない。過半数のメンバーからねくらだとみなされた者は皆無であった。一方自己評定では，自己をねくらとみなす者は12名注（43%）で，否定する者の方が16名と多かった。両者の被評定度数の平均はそれぞれ3.71と2.00であり，差は見出しえなかった（$t=1.71$, $df=26$, $P<.01$）。しかしこれは度数の絶対値が小さい（床効果）ためかも知れない。

ねくらであることとはずかしがりやであることとの間にどのような関係があるか，これを表5に示す。

両者の分布に有意な連関性はみられないが（$\psi=.21$），表より，はずかしがりやがねくらを包含するという関係がうかがわれる。即ち，はずかしがりやを自認する者がねくらを自認するとは限らないが（10/19），ねくらを自認する者はほぼ，自分をはずかしがりやだと思っている（10/12）。

4. MPI の各下位得点との関係

「はずかしがりや」であることの自他認知の4タイプと，MPI による4タイプとの関係を，人数分布で示したのが表6である。

標本数が少なく，統計的処理には耐ええぬが，S^+O^- 型に内向型が多い（7/10）のに対し，S^-O^- 型に外向・非神経症型が多い（6/9）のが目につくところである。

羞恥に関する3タイプのE得点の平均値は，S^+O^+ が19.80（SD；8.26），S^+O^- が23.80（10.78）に対し，S^-O^- が33.67（14.71）と大きく，群間の差は全体として有意である（$F=3.657$, $df=2.26$, $P<.05$）。N得点では S^+O^+ が平均27.20と，S^+O^- の19.80や S^-O^- の17.78よりやや大きいが，有意ではない（$F=2.230$）。L得点はそれぞれ11.80, 11.10, 13.11と殆んど差は

注，1名±反応，以下のデータより削除する

表6　「はずかしがりや」についての評定とMPIの下位得点による分類の関連（数値は人数）

			「はずかしがりや」についての評定				計
			S^+		S^-		
			O^+	O^-	O^+	O^-	
MPI	E^+	N^+	1	1	0	1	3
		N^-	3	2	0	6	11
	E^-	N^+	5	3	0	2	10
		N^-	1	4	0	0	5
計			10	10	0	9	29

$E^+;E>24$, $E^-;E<24$, $N^+;N\geqq24$, $N^-;N<24$

表7　他者からの被評定度数とMPIの各得点との相関（看護学院生，n＝29）

	MPI E	MPI N	MPI L
はずかしがりやについての被評定度数	−.50**	.48**	−.13

**……1％水準

ない。羞恥者が非羞恥者に比べて外向的傾向が低いことが，ここでも確認できた。

次に，被評定度数に表わされる客観的羞恥者度と，MPI の各得点との間の相関をとってみたところ，被評定度数とE得点の間に負の相関が，N得点との間に正の相関がみられた（表7参照，なお順位尺度とみなした場合も，結果に変りはなかった）。即ち，他者からはずかしがりやとみなされやすい人ほど，内向的な神経症的傾が強い，という関係である。L得点との関係がみられなかったことを含め，この結果は調査Ⅰの結果と一致せず，今後に問題を持ち越すこととなったが，現時点では一応被験者群の違いによるのではと考えざるを得ない。つまり，心理学専攻の大学生の方がより自己対象化が進んでおり，客体としての自己意識，即ち他者への意識が強いことが，このような結果の差に表われたのではなかろうか。

全体的考察

今回は，自己認知を他者からの認知の照合を行なう必要上，互いに親交のある小集団2つを被験者群として用いた。従って細かい分析を行なうには標本数が足りず，

表8　「はずかしがりや」であることについての自他評定（大学生＋看護学院生）

		他者からの評定（0）		計
		＋	−	
自己評定（S）	＋	14	19	33
	−	0	12	12
計		14	31	45

数値は人数

各々の集団の特殊性を越えて一般的結論を導き出すには至らないが，全体的な傾向として目についたのは以下に述べる3点である。

1．自己を「はずかしがりや」とみなす者は，調査Ⅰ・Ⅱを通じて，全体の73％と多数を占めた。これまでの研究と同様に，羞恥傾性は青年（今回は殆んどが女性であったが）にとって極めて一般的なものであるということとができよう。

2．これら「羞恥者」のうち，他者からは必ずしもそう思われていない「主観的羞恥者」（S^+O^-）が58％，全体に対する割合でも42％を占めている。

このことは，羞恥体験における他者意識が必ずしも実在の，あるいは現前の他者に対するものではなく，むしろ「内なる他者」へのかなり主観的な意識であることを示唆していると考えられる。もちろん両者は単純に切り離せる性質のものでなく，後者は前者という現実的根拠に依って成立する意識ではあるが，その間にはかなりのずれがあると感じられるのである。ちなみに，自己をはずかしがりやだとは思わない者は，全て他者からも同様に思われており，羞恥者とは対照的である（以上，表8参照）。

3．この，青年期の自我像を象徴する「主観的羞恥者」（S^+O^-）には内向的傾向が目立ち，逆に自他共に認じる「非羞恥者」には外向的，非神経症的傾向が目につくが，断言するまでには至らない。

4．「はずかしがりや」であることに対する態度は，自己嫌悪的調子を帯びるが故に，全体としてはやや否定的であるが，一方で価値中立的な態度も目立つ。「ねくら」であることに比べれば，ずっと受容的といえる。「はずかしがりや」の否定的側面を「ねくら」というのであろうか。

羞恥という，極めて複雑で屈折した心情を，今回のように単純で直接的な方法で捉えようとするのは無理があ

る。しかし直接的であるが故に得られる知見もまた貴重である。少くとも今後の羞恥研究の，言い換えれば青年期の自我の研究の足がかりにはなるであろう。

参考文献

Argyle, M., & Williams, M., Observer or Observed? ——A Reversible Perspective in Person Perception. *Sociometry*, 32, 396-412, 1969.

作田啓一，価値の社会学，岩波書店，1972.

堤　雅雄，見ることと見られること——異性の接近事態における一実験，島根大学教育学部紀要，19，107～112，1985.

堤　雅雄，勝部恵子，木村　孝，庄司明弘，福永直昭，山本　勉，Shyness, 1982（内部報告資料，未公刊）.

内沼幸雄，羞恥の構造——対人恐怖の精神病理，紀伊国屋書店，1983.

山下　格，対人恐怖，金剛出版，1977.

Zimbardo, P. G., Pilkonis, P. A., & Norwood, R. M. *The Silent Prison of Shyness*, Stanford Univ. 1974, (Pilkonis, P. A., Shyness, Public and Private, and its Relationship to Other Measures of Social Behavior. *Journal of Personality*, 45, 585-595, 1977. による)

Zimbardo, P., *Shyness——What it is, What to do about it*, Addison-Wesley Pub. Co., 1977.